

あんこ地蔵 新地町小川字二羽渡 地内

以下の由来は、以前、新地町教育長を務めていた目黒美津英氏の聞き取り調査による記録です。

小川あんこ地蔵由来 (2016年3月10日 新地町図書館 HP 掲載)

元禄年間のころ、「家山(かざん)」という和尚が、全国を巡ること三度、小川の地が最も住みよいところであることがわかり、永住の地と決めた。この地は、清水がわき、海にも山にも近く、雪もあまりふらず気候温和であり、また当時貴重品である塩もあり、海の幸、山の幸が豊かなところであった。

小川に居をかまえた家山和尚は、たちまち村人の信頼を得た。それは和尚が大変こども好きで、いつもこどもたちに囲まれていた事も、村人から好感をもたれる結果になった。こうしていつしか和尚は、「子安家山坊(こやすかざんぼう)」とよばれ、親しまれるようになった。

やがて家山和尚は、寄る年波に死期を覚り、人々を救う思いを地蔵尊に託して残そうと考えた。そして、丸森の石工に依頼して地蔵尊をつくり、小川の人々や、沿道の人たちに手伝ってもらいながら、大内、大沢、赤柴を通り、小川まで運び建立した。家山和尚は、人々の幸せを願いながら永眠したが、その際、毎年7月23日を祭日として供養してほしいといい残していった。

地蔵さんに姿をかえた家山和尚への敬慕の思いは年毎に深まっていき、いつからとなく、こどものかさこ(湿疹)を治す地蔵さまという評判がたち、お参りする人が多くなっていった。かさこができたときは、“あんこもち”をつくり、それを地蔵さんにあげ、その半分をいただいてかさこにぬる、あるいはそれを食べるとかさこは治ってしまうという。地蔵さんとかさこがどうして結びついたかということについては、「家山」という和尚さんの名から生まれたのだという説があるが、しかし、和尚さんは生前こども好きだったから、おそらくこどものかさこの治療なども、しばしばやっていたに違いない。そうした遺徳が表れたものとも考えられる。

こうして人々から「小川のおあんこ地蔵さま」と親しまれ、時代が移り変わっても、小川の人々は、家山和尚を忘れることなく毎年お盆の7月23日(昭和36年から月おくれのお盆となり8月23日になった。)には、あんこもちをつくって地蔵さんにあげ、盆踊りを踊って盛大に供養を行ってきた。この微風はこれからも永く伝えられるものと思う。

家山和尚には、約3反歩の田地があり、和尚は自分の死後の供養費は、ここから採れる米であてるように言い残したという。明治23年に旧国道が建設され、それまで賑わっていた浜街道はさびしくなったため、浜街道の字坂越地内にあった地蔵さんを二羽渡神社の前に移し、さらにその後二羽渡神社境内の現在の所に移した。また、坂越には子地蔵さんがあり、最初子地蔵さんは移さずそのままおいたが、ある人にお告げがあり、ぜひ一緒にしてほしいと家山和尚が願っていることが分かり、子地蔵さんも二羽渡神社の境内に移した。旧浜街道の坂越地内の元の場所には、供養塔や庚申塚など6基の石碑があったが、昭和49年に小川牧野組合が所有地(訳40ha)を相馬地域開発計画のため県農業開発公社に売却し、ここもその地域に入っていたので、昭和49年8月23日にすべて二羽渡神社の境内に移した。

目黒美津英 記(昭和49年8月)



昭和49年に記された目黒氏の聞き取り調査では、家山和尚が死期を覚って、お地蔵様を建立し、永眠したとされていました。しかしながら、子安家山坊と呼ばれ親しまれ、その事を証明するように現在も盛大にお祭りが催されているにも関わらず、埋葬されたであろうお墓が分からないというのは長い間の疑問でした。

この疑問について、二羽渡神社近隣に在住の小野俊雄氏は、令和2年4月10日に以下のような発表を行いました。

「あんこ地藏」縁の家山和尚の足跡を訪ねて

1 事の発端

一昨年来、戦国時代の伊達・相馬領域紛争の歴史に興味を持ち、丸森、亘理、山元、相馬など周辺の史跡や史料館を訪ね歩いていました。

昨年4月20日（土）角田の領主であった石川家累代の菩提寺である長泉寺墓地を訪ねた折、境内の歴代住職記名碑に「第16世 家山慧珍 元禄8年8月15日」の文字を発見しました。



長泉寺（宮城県角田市）歴代住職大和尚碑

家山和尚は、小川の二羽渡神社に鎮座する「あんこ地藏」に纏わる名前であり、古く江戸元禄年間から伝承されたお話でもあります（別紙1）。

これは私が幼い頃、祖父（明治29年生まれ）から聞いた「家山和尚は角田の寺の住職になった」という記憶を呼び起こし、家山和尚と角田長泉寺が結びついた瞬間でもありました。

日を改め5月2日（木）にアポイントが取れ、同寺の住職さんに1時間余りお話を伺う事が出来ました（別紙2）。

住職（第42世・奥野成賢）様のお話から、お寺は古く火災に遭って資料が

別紙1は、上述した目黒美津英氏の調査成果のこと。

残っていないこと、同寺住職は伝統的に世襲制ではないこと、数年前に和尚の子孫の方が墓参のために訪ねてきたことなどの情報が得られました。新地町に伝わるあんこ地蔵を紹介すると、住職さんからは「家山和尚は、当寺第16世家山慧珍和尚と同一人物と考えて間違いない」とのお墨付きを頂きました。

なお、静岡に和尚の生家が残っているということ、その子孫が墓参に訪れていたということが気になり、家山和尚が開山したお寺が角田に長泉寺末寺として3つあるという情報から、その手掛かりを探すこととしました。

2 家山和尚が開山したとされる角田三寺の訪問

5月30日(木)、前日の雨から一転して天気も回復したのを機に、アポイントもとらずに家山和尚が開山したとされる角田三寺を相次いで訪問しました(別紙3)。

最初に伺ったのは、枝野地区にある東禅寺でした。同寺の住職さんは、保管ファイルを持ち出し、A4版の資料3枚をコピーしていただきました(別紙4)。

それは、数年前にお寺を訪れた家山和尚の末裔にあたりとされる方からいただいたものだとのことでした。そこには、静岡県伊豆市の住所と梅原平重の名前がありました。東禅寺は、元禄8年(1695)に家山和尚の開山となっており、現住職は25代目にあたりとのことでした。

次に訪ねたのは、佐倉地区にある自照院でした。ここでは、来訪者の名前と電話番号メモが出てきました。名前は梅原平重とあり、東禅寺を訪ねたとされる方と同じ名前でした。同寺は、寛文8年(1668)家山和尚の開山で、現当主は9代目にあたりとのこと、寺には無住職の時代があったということでした。

最後に尋ねたのは、坂津田地区の徳蔵寺でした。住職さんから、安永年間に坂津田村肝入の御用書出とされる風土記が新たに見つかったとのことでした。同書には、元禄7年(1694)に家山和尚が開山したとされていることが確認できました。現住職は9代目ということで、ここも過去に無住職の時代があったとのことでした。

以上のように、家山和尚が関係したお寺巡りの結果得られた手掛かりを基に、5月31日付で静岡の梅原さん宛にお手紙を出したところ、6月13日にご本人から電話をいただきました。

家山和尚の生家とされる現当主の梅原さんは、昭和10年5月生まれで84歳となって耳も少し遠くなっているようでした。返事が遅れたことを詫びるとともに、今回の奇縁には大きな驚きと感動を覚えているとのことでした。

そして、8月18日(日)実施予定のあんこ地蔵尊祭礼には新地を訪れてみたいとの意向が示されました。

3 関係者の新地町訪問と「あんこ地藏」の見学

8月18日(日)に開催された「令和元年度 あんこ地藏尊盆踊り大会」を見学に来訪したのは、家山和尚の生家末裔で12代当主にあたる梅原平重さんとその次男梅原拓ご夫婦(東京都在住)の3名でした。

梅原家族は、17日(土)平重さんが静岡から東海道新幹線で東京まで、東京からは息子夫婦と合流して東北新幹線で白石蔵王駅へ、同駅で降り駅前でレンタカーを調達して角田経由で新地に到着という経路を辿りました。

当日我が家での情報交換を行い、「鹿狼の湯」に宿泊しました。祭り当日は、小川公会堂で行われている奉納用の地藏餠餅づくりを見学して、その足で二羽渡神社境内のあんこ地藏でのイベントを見学しております。

テレビ局2社(福島放送、福島中央テレビ)の取材を受けており、放映は、8月21～22日に夕方の時間帯に行われています(DVD参照)。

当日の午後からは、長泉寺の奥野住職が当地を訪れ、二羽渡神社のあんこ地藏前にて祈祷し、また以前に地藏があった小川坂越地区の旧道(海道)箇所を現地見学しました。

4 これまでの経過から判明した家山和尚の足跡について

- (1) 和尚は、現静岡県伊豆市出身で、千葉家の次男として生まれていること。
- (2) 三重県白子寺の住職、静岡県白田寺、神奈川県最乗寺勤番など、全国を巡った僧侶であったこと。
- (3) 亡くなったのは元禄8年(1695)8月15日で、角田市長泉寺に墓地があること。
- (4) 角田市の長泉寺末寺となる自照院、東禅寺、徳蔵寺の開山和尚となっていること。

5 まとめ

- (1) これまでの情報からすると、家山和尚が新地に滞在した時期は、「家山慧珍和尚の動向とその時代背景」(別紙5)のように推定できるのではないかと考えられます。

今後更に家山和尚の調査研究を深めるうえでポイントとなるのは、佐倉の自照院ではないかと考えています。

- (2) 自照院は、角田石川家4代の宗弘公夫人梁姫(ふりひめ)を供養するお寺

として知られています。

梁姫は京都の公家水無瀬中納言兼俊の娘で、明暦2年(1656)に13歳で石川家宗敬公と牟宇姫の長男宗弘の正室として迎えられました。

数年後に体を壊して市内桜地区小山東に建てられた屋敷で療養したと伝えられています。梁姫は寛文8年(1668)9月20日に跡取りを産むことなく26歳の若さで亡くなっています。同寺は、梁姫を供養するためにその屋敷跡に供養寺として建立されたものです。

長泉寺奥野住職によると、「自照院はもともと曹洞宗ではなかったこと、十一面千手観世音菩薩をいただく観音堂で、家山和尚はその堂守をしていた」とのことでした。文献(石川氏一千年史、角田市史別巻1)によりますと、夫人が亡くなった折に「自照院殿玉窓妙珠大姉と法諡す」とあり、その御霊を慰めるため「佐倉村に一字の道場を建て自照院と号す」とあります。

- (3) 家山和尚の生い立ちや経歴など不明な点多すぎますので、今後の調査研究の成果を待ちたいと思います。



梅原家のご家族

(あんこ地藏前、中央が同家12代当主)



長泉寺42世住職

(家山和尚記念石碑前「當庵開記教
譽家山和尚 安永7年2月12日」)

あんこ地蔵由来の家山和尚の足跡を訪ねて

—曹洞宗高源山長泉寺住職からの聞き取り結果—

*日時：令和元年5月2日（木）10:00～11:30

*場所：宮城県角田市「長泉寺」にて

Q1：第16世「家山慧珍」和尚の読み方について

Ⓐ：「かさん えちん」と読んでいる。

Q2：家山和尚の長泉寺住職在位期間について

Ⓐ：記録がない。

Q3：長泉寺住職になった経緯について

Ⓐ：当寺は世襲制ではなく、住職になった経緯についての記録はない。

Q4：新地（磐城国宇多郡小川村）との係りにについて

Ⓐ：新地町福田の東林寺が当寺第11世琴庵和尚の開山となっており、本寺・末寺の関係にあることなども影響しているのではないのでしょうか。

Q5：寺墓域にある歴代住職碑の年代の齟齬について

Ⓐ：当寺で最期を迎えていない場合があり、他の寺の住職をして亡くなったことによるものである。

Q6：全国行脚等の足跡について

Ⓐ：家山和尚の子息にあたる方が数年前（震災以降）に家系図をもって来訪された。その人は家山和尚の傍系にあたり、東京で和菓子屋を営んでいるとのことであった。本家は静岡県伊豆市にある大きな農家で、現在も生家は残っているとのことであった。（名刺等の記録があるかと質したのに対して）プライバシーの問題があるので、名前住所などは聞いていない。

Q7：家山和尚が関係した寺院について

- ①：関係した寺は角田に三つあり、①佐倉自照院（寛文8年、1668年）、②坂津田徳蔵寺（開山日不詳、注参照）、③枝野東禅寺（元禄8年、1695年）である。

【注】徳蔵寺住職によると、2度の火災に遭って資料が残っていない。自照院の住職が当寺の住職を兼ねていた時代もあるので、当然に自照院より歴史は新しい。何年か前に、東京の会社の人が入念して来たことがあった。震災後に家山和尚に關係するお寺を巡っていた。—令和元年5月3日（金）9：45住職から電話での聞き取り—
（住所〒981-1534 角田市坂津田字大久保18 Tel0224-69-2614）

Q8：家山和尚に関して長泉寺が保有する資料について

- ①：今回お渡しする資料以外は一切ない。しかし、新地に伝わる家山和尚と当寺の16世家山慧珍和尚が同一人物と考えて差し支えないと思う。私も近いうちに新地に行ってみたいと思うので宜しくお願いしたい。



曹洞宗高源山長泉寺山門（右は、歴代住職墓石で中央が家山和尚）

長泉寺第42世住職奥野成賢氏の名刺

曹洞宗  長泉寺

奥野成賢

〒981-1505
宮城県角田市角田字長泉寺69
電話 (0224) 62-1004
ファクシミリ (0224) 63-0063
ホームページ <http://chousenji.jp/>

○ 家山和尚が開山したと伝わる角田の3寺(上から自照院、徳蔵寺、東禅寺)



自照院と観音堂



東禅寺



徳蔵寺

家山慧珍大和尚のこと

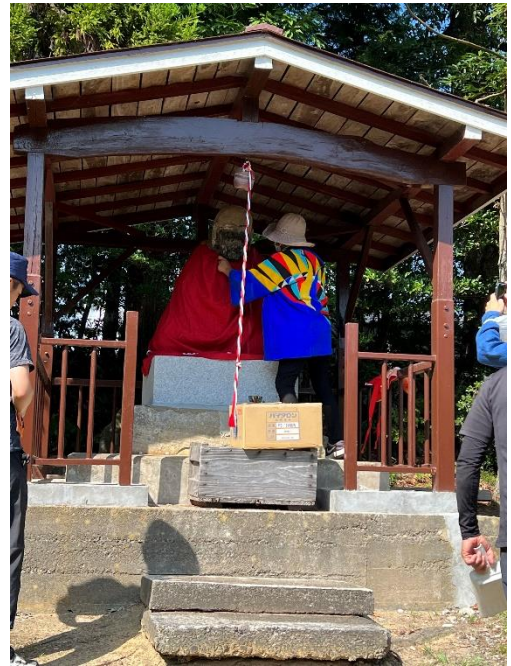
- 宮城県伊具郡角田町 曹洞宗高源山長泉寺第16世中興禅師として元禄8年(1695年)8月15日没。
- 先祖 喜叟道慶上座(初代 市郎左エ門)の弟なりと傳へあり。
- 伊勢国 三重県河芸郡白子に住職せる事も有り。
その後、伊勢の白子を出て賀茂郡白田の寺に関係ありと傳へあり。調査するも未だ不明なるも、長泉寺より金一両を白田に送ったことは事実なり。
- 小田原の最乗寺の勤番にて勤め、その当時の記念として御金印(オカナイン)にて円に卍の掛け軸有り。
御金印は、最乗寺の宝物にしてこれを押印して御守札にして発行して居るが、この御守札は敵一倍の御守札で如何なる大敵に會ふも必ず比の敵一倍の力を生じて、これに勝つ事が出来ると言ふ物である。
- 家山慧珍大和尚よりの書状は多数あったとの事。
- 御守り箱の中には、水晶を芯にした二尋(ふたひろ)余りの巻物に系図が朱で書かれていた。系図は、官武天皇一本親王より始まり、千葉氏を代々名乗りし千葉平左エ門より梅原氏に変わる。

○ 家山慧珍和尚の動向とその時代背景

年月日 (西暦)	家山和尚関連事項	その時代の動き
寛永 8 年 (1631)		福田東林寺開山 (長泉寺 11 世琴庵和尚)
寛永 12 年 (1635)	長泉寺 12 世無堂和尚示寂 (11.17)	参勤交代の制度化 (3 代将軍家光、武家諸法度)
明暦 2 年 (1656)		角田 4 代宗弘 (16 歳)、京都公家水無瀬家梁姫 (14 歳) 婚姻
万治 3 年 (1660)		伊達 19 代綱宗、幕府より隠居命令、2 歳の亀千代 (後の 20 代綱村) 襲封
寛文 3 年 (1663)		伊達兵部宗勝、反対勢力を弾圧 (切腹 17 名を含む 120 名処分)
寛文 6 年 (1666)		亀千代毒殺未遂事件
寛文 8 年 (1668)	佐倉自照院開山、住職を辞して全国行脚 (年代は不明)	梁姫没 (26 歳)、牟宇姫母お山の方没 (82 歳)、石川宗敬没 (62 歳)
寛文 10 年 (1670)		伊達一門内部での知行地境争い裁定幕府直訴
寛文 11 年 (1671)		幕府審議開始、原田甲斐・伊達安芸の刺殺事件 (大老酒井忠清邸)
延宝 3 年 (1675)		伊達右近新地に閉居 (28 歳)
天和 2 年 (1682)	家山和尚の兄千葉市郎左衛門没	
天和 3 年 (1683)	長泉寺 17 世 (佐倉自照院 2 世) 法英和尚示寂 (5.28)	角田・牟宇姫没 (76 歳)
元禄 2 年 (1689)	元禄年間新地に滞在の可能性	松尾芭蕉の奥の細道 (3.27~9.6 芭蕉 46 歳)
元禄 3 年 (1690)	長泉寺 15 世在天和尚示寂 (2.27) 家山 16 世住職に就任 (月日不明)	
元禄 7 年 (1694)	坂津田徳蔵寺開山	松尾芭蕉没 (10.12、51 歳)
元禄 8 年 (1695)	枝野東禅寺開山、長泉寺 16 世家山慧珍和尚示寂 (8.15)	
元禄 14 年 (1701)		江戸城松之廊下事件 (3.14)
元禄 15 年 (1702)		吉良邸討入 (12.14)
元禄 16 年 (1703)		大石内蔵助切腹 (2.4、44 歳)

以上、小野俊雄氏のレポートとなります。

地元の方々による「あんこ」を塗る様子（令和5年）



新地町史自然民俗編（平成5年新地町教育委員会）の291頁に以下のように記載されています。

小川の二羽渡神社の境内に建立されている地藏さま。土地の人々は「アンコ地藏」とか「かさこ地藏」と親しく呼んでいる。

8月23日が祭りの日で、地元の弥生会（若妻会—以前は婦人会）の人々が早朝宿（公会堂）に集まって餅をつき、まずは地藏さまに供える。この餅を食べると病気にかからないと伝えられており、人々は持ち帰って家族一同で食べる。

また、子どもにかさこ（できもの）ができるとあんこ餅をつき、地藏さまの口元にアンコを塗って平癒を祈る。残ったアンコは持ち帰り、かさこに塗ったり食べたりする。日がたつてアンコがはがれるようにかさこもとれると言い伝えている。治ると母親は子どもを連れて、赤い着物や頭巾を奉納しお礼参りをする。

この地藏さまは以前富倉、杉目とさまよい歩いていたが、もとの小川に戻りたいと地元の人々の夢枕に立ったので、移して再び祀ったとも記載されています。

小野氏のレポートにもありますが、平成当時月遅れのお盆（8月23日）に行われていたお祭りは、平成20年頃から8月23日に近い日曜日に行われることとなりました。

《参考・引用文献》

☆新地町教育委員会 「新地町史 民俗編」（1993）

☆新地町教育委員会 「ようこそ新地町へ」（1993）

著書名の先頭に☆印のついている資料は、新地町図書館にて蔵書しております。